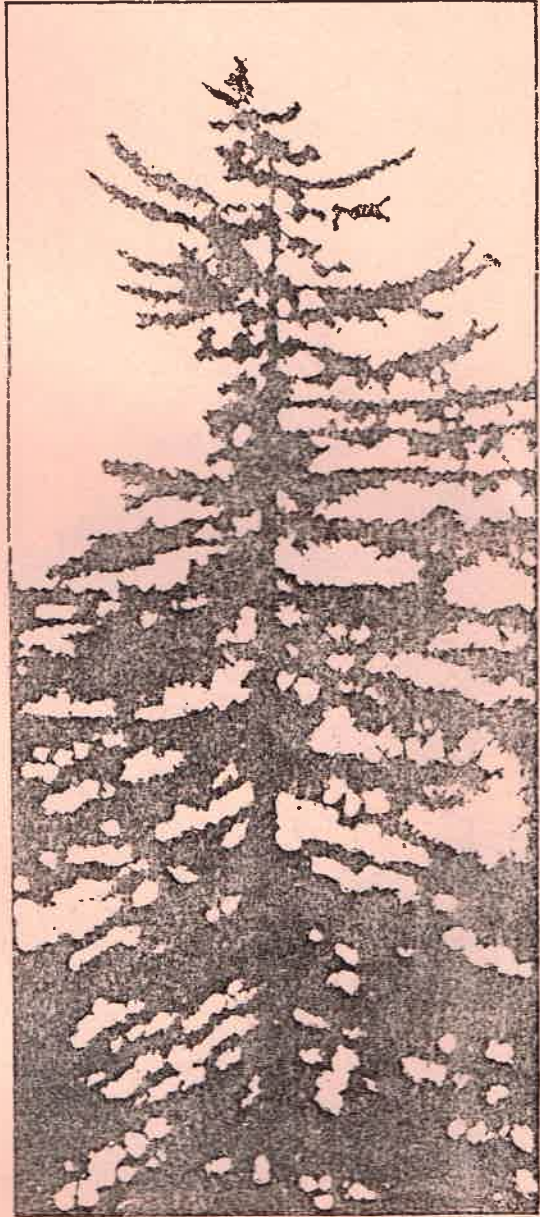


# エゾマツ

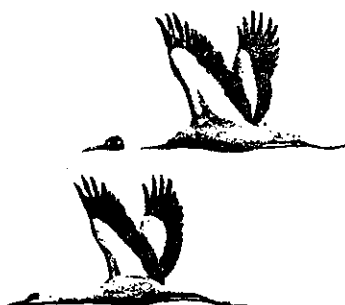


No. 24

1993 . 1 . 10

北海道ボランティアレンジャー協議会

## [巻頭言]



今年も大いなる感動と  
楽しさを求めよう。

会長 大友 健

1993年の新たな年を迎え、会員の皆様にはますますご健で、希望に満ちた年頭のこととお喜び申し上げます。

昨年は皆様、自然観察会の解説を通じ自然のありがたさ、そして自然の中の生物共存を毎度話されているだけに、地球環境規模での問題点をとらえ、今こそ我々は自然を大切に、この自然は「子孫への相続財産」という意識を強くもちながら、多くのボランティア・レンジャーの活動をしていただきありがとうございました。

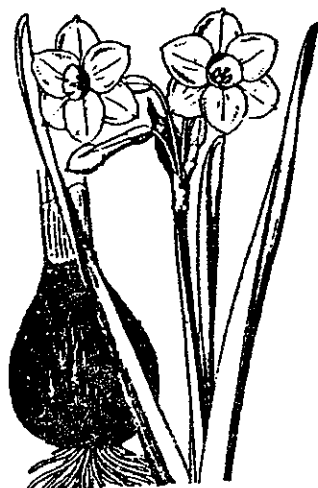
本年も、自然保護憲章の意とする自然の厳肅さに目覚め、自然界における大気汚染、河川の汚濁、水源や緑の消失など多くの問題を、生物共存の原点に立ち眺め感じ、意識を強めながら利活用に微力をつくしましょう。

ご承知のとおり、森の中はなんとなく歩いていても、十分に気分がよいけれど森林のすばらしさ、楽しさは知識が深まるにつれ豊かさを増して、自然における営みに驚き、より興味を抱きそして大きな感動を味わうことでしょう。

最近に至っては、小学生に対する環境教育の必要性から、文部省指導のもとで体制作りが進められ、酸性雨、資源の節約、リサイクルなどにたいする意識の高まりが功を奏している点は、喜ばしい限りでこれらの成果は、21世紀を背負う青少年が果たそうとしているのだと考えると、私達は地域における活動者として多角的に自然環境のより良い理解のため、行動を展開する必要があるのではないのでしょうか。

体験学習を重ね、地域の環境学習にと、そうして森林文化史、地球的視野の環境学習に進む時代が近づいていると思われるのです。

このようなことなど思いつつ、豊かな自然の道しるべである野の花、山の花に多くの人々と楽しさを味わえるよう頑張りましょう。



すいせん *Narcissus tazetta* L.

## 新春にあたって

副会長 佐々木 幸 夫

昨年3月31日で待ち望んでいた定年を迎えてから、毎日のように好きな自然に親しむことが出来たものの、11月上旬に入ったらその疲れがたまったのか、落葉広葉樹が休眠し始めたのに期を合わせるように体調が悪くなった。

そんな体調が災いしてか、もっと落葉期間が楽しめるようなことを学ばなければ、と思いながらもさっぱり気が乗らない日々を送り、ある種の腹立たしさを引きずりながら新春を迎えたのも、齡のせいもあるのだろうか。

とは言いながらも、新春にあたって1993年は、こんな体験を通して得たものが着実に身に付くことを第一の条件として、焦らずに生きていきたいものと、自らを戒めている。

それにしても、昨年の協議会定期総会で、そのような器でもないのに副会長（研修・広報部担当）に選ばれ、少なからず精神的負担がある、というのが偽らざる心境である。

協議会は、昨年11月30日現在で、会費を納入した会員が122名になった。その内容をみると、札幌市を含めた石狩支庁管内が61名で、全体の約50%を占めている。

従来から会員構成がこのような傾向にあるため、事業計画も札幌中心となり、せっかく地方から総会に出られた会員から、「これでは、北海道ボランティア・レンジャー協議会ではなく、札幌支部の総会ではないか」という批判が出てくるのも理解できる。

が、さして予算も多くない協議会の実態から、年間を通して、札幌かその周辺での行事開催は、数多くの会員が参加可能との思いから、このような事業計画になっているのである。

本年は、8月までの事業計画はご承知のように決まっているが、地方での自然観察会などが計画されている場合は、連携しながら実施していく形など考えられないだろうか。

また、新年を迎えて「新たに自然観察会を計画するが、協議会の協力が必要だ」という場合も協議会としても歓迎するところであり、これらが事業計画に上積みされると、地域性も出てくると思うが、会員各位の積極的なご意見を頂きたいものだ。

協議会の運営は、会長以下役員で成立するものでないことは、会員各位がよく理解しているところであるが、本年は会費だけの会員ではなく、情報交換や行事に参加できる会員であることを希望しているし、地方幹事各位からの情報提供の期待も大きい。

いずれにしても、ボランティアの域での活動であり、会員の数が仮に多くなくても実りある組織になれば、と念じている。

昨年4月に結成されたオホーツク支部のように、各地で支部組織ができ、より活動が活発化されることを期待し、私自身も微力ではあるが、常に感謝の気持ちで、懸命な努力を惜しまない生き方をしていこうと小さな胸に誓っている。



新しい年を迎え、会員の皆様はいかがお過ごしでしょうか。

昨年中は、協議会の事業実施において、皆様のご協力ありがとうございました。

本年も、皆様のご協力を得て、協議会の事業実施にあたりたく存じますので、よろしく  
お願いいたします。

本号は、新春号ということで北海道保健環境部自然保護課の仲川さんから原稿を  
いただきましたので紹介いたします。

また、かねてからお願いしておりました地方幹事が、8名受諾されましたので  
お知らせし、各地域の会員の皆様方との連携をうまく取りたいと思います。

本号の投稿者を紹介します。

白老郡白老町緑丘2丁目11-16	堀尾博義さん	胆振・日高地方幹事
留萌市緑ヶ丘町2丁目	祐川弘さん	留萌・宗谷地方幹事
札幌市北区新琴似6条4丁目3-13	田中利男さん	
帯広市西18条南2丁目11-87	池田啓介さん	
富良野市西麓郷2	大宮正義さん	
旭川市神楽3条6丁目	吉田政徳さん	上川地方幹事
河西郡芽室町西8条6-1	田中一儀さん	十勝地方幹事

◎会報は、関係機関との連携及び会員の皆様の情報交換を図るため、発行されています。  
ですから、できるだけ多くの会員の皆様の参加をお願いいたします。

仲川幸雄

ボランティア・レンジャー育成研修会（以下「育成研修会」）は、昭和60年に環境庁が知床国立公園内の斜里町海別自然休養村・施設管理センターで開催した自然観察指導者育成講座を参考に、自然保護普及啓発の一環として、北海道の豊かな大自然の素晴らしさを、多くの人々に理解してもらうため道が始めたものであります。

自然を守るためには、すべての人々に自然の大切さを理解してもらうことが重要で、そのためには自然保護教育の基礎知識を身に付けた人々が自然と人との橋渡し役として、道民の自然探求のニーズに答え、また、一人でも多くの人に自然と接する機会を提供することが必要であります。

そこで、人々に自然のふれあいの機会を提供し、自然観察会や探鳥会などの活動を通じて、より多くの人々に自然の素晴らしさを理解していただくために、「育成研修会」が開催されることになったものであります。

ボランティア・レンジャー（以下「ボラ・レン」）の方々が、身近な自然を対象に、身近な人々と共に自然観察会などで活動することにより、地域に根ざした自然保護思想の普及啓発が図られるものであります。

昭和61年度から始まった「育成研修会」も平成4年度で13回を終了し、472名が「ボラ・レン」として誕生しました。472名の「ボラ・レン」のなかには、既に各種の自然観察会等で指導的立場で活躍されている方々も数多くおられます。

さて、「育成研修会」の概要は、室内講義と野外実習から構成されており、講義では「北海道の自然を知る」、「北海道の植物を知る」、「北海道の動物を知る」、「北海道の野鳥を知る」、「自然の見方・見せ方」といった基礎知識の習得を図り、野外実習は「探鳥会」、「森の観察会」、「自然の見方・見せ方の実技」についてを実際に体験してもらうといった形で行なわれます。

また、「育成研修会」を受講された方々が、自然解説等を通して自然保護思想の普及啓発と将来にわたって北海道の自然環境の保全に役立つことを目的に、任意で組織した団体として「北海道ボランティア・レンジャー協議会」があり、会報「エゾマツ」が年4回発行されるほか、独自に道立自然公園野幌森林公園をフィールドに自然観察会を開催しています。

このような「ボラ・レン」の活動も、「育成研修会」を受講した方々がその日

から活躍できるものでなく、道では一人でも多くの「ボラ・レン」が各種自然観察会等で活動していただくための、二次的な研修として「ボランティアレンジャー実践セミナー」（以下「実践セミナー」）を平成元年度から開催しております。

この「実践セミナー」は、「ボラ・レン」が活動するうえで必要な、より実践的な知識と技術の習得の場であります。

また、知識の習得と併せて活動の場の確保も重要なことであり、道は平成2年度から、「ボラ・レン」の地域における活動の場であり実習の場でもある「自然教室」を、年間23回支庁や市町村の共催等の形で開催しております。

このほか「ボラ・レン」の活動としては、現在、環境庁が主唱する「自然に親しむ運動」の催しが年間98回開催されており、この行事に自然解説員として参加しています。

これらの各種行事に「ボラ・レン」の参加・協力は、年間延べ300名程度となっており、また、「ボラ・レン」の解説を受けた方々は、年間6万人にもなっていますが、さらに活動の場の拡充や「ボラ・レン」の協力を期待するものであります。

近年、環境庁においてはインタープリテーション（自然解説）の重要性を考え、自然解説指導者養成システムの確立と資格認定制度の創設に向け、検討が進められている状況にありますが、このような状況の中で道としても「育成研修会」及び「実践セミナー」については、継続的に実施し、自然環境教育としてさらに内容の充実を検討していかなければなりません。

道民一人ひとりが自然とふれあい、自然の仕組みや大切さを理解することを通して、将来にわたり自然をワイズユース（賢明な利用）していくため、一人でも多くの「ボラ・レン」の養成を行ない、ボランティアの活動からも自然を保全し、全し、持続的に利用していくための考えを多くの人々に伝え、理解してもらう必要がございます。

今後とも、多くの方々が「育成研修会」を通して、また、「ボラ・レン」の活動により、自然環境の保全に理解をいただければと思っております。

（北海道保健環境部自然保護課保全係）

# 北海道ボランティア・レンジャー 協議会 会 則

## 第 1 章 総 則

### (名 称)

第 1 条 この会は、北海道ボランティア・レンジャー協議会（以下「会」という）と称する。

### (目 的)

第 2 条 この会は、会員の自然観察及び自然保護に関する意識の高揚を図り、自然解説等を通して自然保護思想の普及啓発に務め、関係機関と協力のもとに将来にわたって北海道の自然環境の保全に寄与するとともに、併せて会員相互の親睦を図ることを目的とする。

### (事 業)

第 3 条 この会は、下記の事業を実施する。

- (1) 自然保護に関する関係機関との連絡提携を図る。
- (2) 関係機関との連携及び会員相互の情報交換を図るため、会報を発行する。
- (3) 会員相互の資質の向上を図るため、研修会等を開催する。
- (4) その他、目的達成に必要な事業を実施する。

### (事 務 所)

第 4 条 この会の事務所は、総務部担当副会長宅に置く。

## 第 2 章 組 織

### (会 員)

第 5 条 この会の会員は、ボランティア・レンジャー育成研修会の受講者で年会費を納入した者とする。

- 2 地方支部を組織することができる。



(役員)

第 6 条 この会に次ぎの役員を置く。

会 長	1 名
副会長	2 名
幹 事	若干名
監査員	2 名

2 役員は会員の互選によるものとし、幹事の互選により総務部・研修部・広報部の 3 部長を決定する。

(職 務)

第 7 条 会長は、会を代表する。

2 副会長は会長を補佐し、会長不在の時はその職務を代行する。

3 幹事は各部に属し、部の分掌事項を執行する。

4 監査員は、会計を監査する。

5 各部の分掌は次ぎの通りとし、副会長は各部を調整する。

総務部は、会計・渉外・庶務・その他を執行する。

研修部は、研修行事及び観察会に関することを企画し執行する。

広報部は、会報の発行に関することを企画し執行する。

(任 期)

第 8 条 役員の任期は 2 年とし、再選を妨げない。

## 第 3 章 総 会

(開 催)

第 9 条 総会は、年 1 回開催する。

2 臨時総会は、会長が必要と認めた時開催する。

(権 限)

第 10 条 総会は会長が召集し、次ぎ事項を決議する。

(1) 会則の制定及び改廃に関すること。

(2) 事業計画の策定並びに収支予算及び決算に関すること。

(3) その他総会で必要と認めた事項。

(議 長)

第11条 総会の議長は、その総会の出席会員のうちから選出する。

(定足数)

第12条 総会は、会員の二分の一以上の出席がなければ成立しない。

(議 決)

第13条 総会の議事は、出席会員の過半数の同意をもって決し、可否同数の場合は、議長の決するところによる。

(委 任)

第14条 総会に出席できない会員は、多くの会員を代理人として表決を委任することができる。この場合において、前2条の規定の適用については出席したものとみなす。

## 第4章 事業執行及び会計

(事業年度)

第15条 この会の事業年度は、8月1日から翌年7月31日までとする。

(会 計)

第16条 この会の経費は、会費・寄付金・その他によるものとする。  
2 会費の額は、総会により決定する。

付

貝

この会則は、昭和61年12月 6日より執行する。

昭和63年 8月 1日改正。

平成 元年 7月 8日一部改正。

平成 4年 8月 8日一部改正。

平成4事業年度地方幹事

地 域	氏 名	住 所	電話番号
渡島・桧山	白 井 信 二	041-11他田郡七飯町字本町154-1	0138-65-9821
後 志	池 田 郁 郎	048-15虻田郡ニセコ町ニセコ482	0136-58-2628
胆振・日高	堀 尾 博 義	059-09白老郡白老町緑丘2丁目11-16	0144-82-3870
上 川	吉 田 政 徳	070 旭川市神楽3条6丁目	0166-62-3542
留萌・宗谷	祐 川 弘	077 留萌市緑ヶ丘町2丁目	01644-3-7636
十 勝	田 中 一 儀	082 河西郡美瑛町西8条6-1	0155-62-6141
網 走	和 泉 勇	090 札幌市とん田町309-3	0157-22-2359
釧路・根室	佐々木 文 雄	085 釧路市春楼6丁目2-2	0154-41-5750

上記のとおり、地方幹事が受諾されました。

地方幹事の皆様には、種々、手数をおかけする場合がありますがどうか、よろしくお願いいたします。

会員の皆様の近くにおりましたら、是非、声をかけたり連絡をとられて

「ここで、こういう観察会がある」等の情報交換をしていただき、広報

等に、それを提供願えれば協議会としましても、非常に心強く思います。

役員と地方幹事との間の連絡にとどまらず、会員の皆様が積極的に地方幹事

とコンタクトをとられ、関係地式に出向く時は、是非、素通りしないことを

期待します。

〈これまでの役員会報告〉

第1回役員会（平成4年8月24日 午後6時～午後8時 札幌市職員会館 19名）

- 議案
- ・第7回定期総会で選任された幹事の各部長選出と部編成の微調整
  - ・地方幹事の選任について（地方の活動状況や名簿等資料が無く次回に）
  - ・新事業年度における事業推進について
  - ・その他 会則の見直し、会報の早期作成について

第2回役員会（平成4年9月10日 午後6時～午後8時 札幌市職員会館 16名）

- 議案
- ・各部内での検討事項について意見交換
  - ・地方幹事の推薦について（8名）

第3回役員会（平成4年10月12日 午後6時半～午後8時半 市民会館 14名）

- 議案
- ・地方幹事の承認状況について
  - ・会員研修について
  - ・協議会腕章の作成について

協議会員としての連帯感を少しでも強め、道内各地の特色を生かした活動が可能になるよう、役員一同限られた知識と経験の中で検討しております。

これからも会員の皆様のアドバイスや情報等を是非ともお願いいたします。

---

## 新刊 図 書 案 内

最近の自然志向で多くの人が森やみどりに親しむようになり、「森の案内人」としてグリーンインストラクターの活躍が期待されています。北海道林業改良普及協会では、その一助として北海道立林業試験場などの協力を得て、より楽しく、より正しくみどりとつき合うための手引書として「森と遊び」（仮称）を平成5年4月に発行予定です。

装丁A5判で200ページのボリュームになり、内容は①楽しい企画のたてかた ②学習のすすめかた ③森との楽しみかた ④楽しい工作（標本の作り方、木の実や枝を使った工作）⑤森の動物たちの観察 ⑥事故の応急措置 ⑦森・みどりのミニ知識 などで価格は2,000円を予定しています。

内容は私たちボランティア・レンジャーにとっても、学ばなければならないものばかりでまさに必携の書と言えるでしょう。

詳細は、北海道林業改良普及協会（〒060札幌市中央区北2条西19丁目道森連会館内 ☎（011）611-4972）に、お問い合わせください。

# ホロホロの山頂から

白老町 堀 尾 博 義

ホロホロ山(標高1322.4m)は、室蘭岳、オロフレ山、白老岳、樽前山、風不死岳へと南西から北東に連なる胆振アルプスの最高峰です。ホロホロ山頂には、これまで大滝村から徳舜誓山を經由するルートだけでしたが、どうしても白老側から登りたいという山男と山女の夢は、1983年ついに自らの手により登山道が開かれました。

その後、北海道自然100選の指定を受け、また、登山口までは白老インターから約30分という便利さもあって、地元愛好者のほか札幌、千歳、苫小牧、室蘭など大勢の人々に親しまれています。

登山道を開設してから10年になりますが、ホロホロ山に対する熱い思いは今でも失せることなく、年2回きれいに草刈りがされ、良く整備された登山道は白老山岳会の自慢のひとつです。そのためかどうか登山口から山頂までゴミやたばこの吸い殻を見ることもなく、登り2時間、下り1時間半の山行を快適に楽しむことができます。

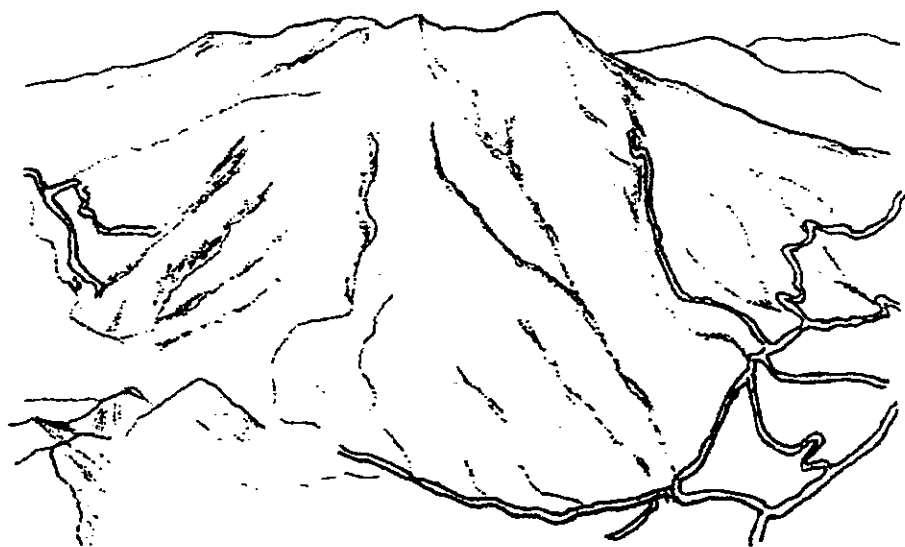
登山道ルートは、身動きができないほど密生したネマガリダケやクマイザサに覆われ、笹類以外の植生は殆ど見ることはできませんでしたが、開設後の草刈りによって日照条件が良くなり、ミミコウモリやゴゼンタチバナ、イチゲ類、ツバメオモト、ミヤマエンレイソウなど多数の植物の侵入が見られ登山者を楽しませてくれます。また、ホロホロ山頂から約1km離れた徳舜誓山までの尾根筋にはキバナシャクナゲ、イワツツジ、コケモモ、ミヤマアズマギク、ハクサンチドリなどの高山植物を見ることができます。

山頂からは、日高山脈や無意根山、羊蹄山、駒ヶ岳などの大パノラマや朝日に染まって雲海に浮かぶ支笏湖、夕日に光る洞爺湖など数限りないすばらしい世界が展開します。

しかし、平成4年3月14日北海道環境影響評価審議会は、大滝

村で計画されている徳舜瞥山とホロホロ山の山腹1600haをスキー場やゴルフ場、リゾートホテルなど通年型のリゾート施設とするアセスについて「特に意見なし」と知事に答申したと各紙は報じています。

ダケカンバの新緑と残雪、ガスの切れ間の深緑、秋の黄葉、銀覆の樹冠など四季折々のドラマを繰り広げる眼下の樹海を私たちはいつまで見ることができるだろうか。



## 留萌市 黄金岬 での

### 磯の自然観察会に参加して

留萌市緑が丘2丁目 祐川 弘

好天に恵まれて行われた磯の観察会では、久しぶりに海水パンツ姿で観察する事ができました。黄金岬は私にとって子供時代は生活の場でありました。帰校後はカバンをぼんとなげだしては、岬に走ったものです。晴天日だけでなく、雨でも時化でも、更に冬でも荒波や氷結を見に出かけました。夏季は遊泳、競泳、飛び込み、遠泳、潜水等を、仲間達と競い合い遊んだものです。特に潜水では海中観察や海の獲物取りに夢中になり寒くなると岩の上で焚火の暖をとり、暗くなるまで遊びつづけたなつかしの場所でした。ただ漠然として潜り水中をながめ、手あたり次第に海の物を漁る連日であり獲物の名称や生態等を考察する技量を持ち合わせていませんでした。

所が今回は、市の水産課の講師を招き採集後は海へ返すことを条件で入手の採集物を手に色々教えていただき勉強になりました。その中から特に印象深かった事を列記してみます。

何ものか解らず黙認しており貝か虫か疑問だったものがヒザラ貝と確認しました。平常ツブで、かたづけていたものの生態や、生活分類など、やま貝と称し食べていた貝がカサガイ。大変な珍味で、生食・焼き貝・煮貝・などで愛好していた、しる貝（方言です、しゆり貝とも言います）が、イガイであり、貝だとおもっていた、フジツボがカニやエビのなかまで美味であること、クラバガニがカニではなく、ヤドカリの仲間で歩く足が6本である事。磯でよく見かける小さなカニもイソガニとヒライソガニのちがい、その見分け方、フナムシ・ハマトビムシ・ワレカラ・などの認識ずけができました。ナマコ・ヒトデがウニのなかまであつたり貝をたべるヒトデの不思議。まだまだウニや海藻のお話などが盛りたくさん、参加の大人も子どもも大変良い勉強になりました。最後に一言、私が採集のためにランニングで腰近く迄、浸っていたらスピーカーでとがめられはつとし

て回りを見たところ、海中に小さな立て看板がありそれより沖は遊泳禁止になっております。大変失礼いたしました。そのとき私の疑問が解けました。今日のような好天にどうして遊泳者が居ないのか、方々に点在する有名な黄金岬の岩上に一人一人居ないのが不思議であったのです。これは居ないではなく、行かせないのだなあ、と納得できました。

昔を知る私にとってあのような光景は、わさびのきかないお寿司を食べたような味気なさでした。国民皆泳が叫ばれている今日せつかくある自然の泳力養成の場を閉ざすのはいかなものだろう。今遊泳できる範囲では浅く岩場がキケンで遊泳には不的確です。

禁止理由が獲物の乱獲防止であれば、手段もあるはずで、市民や観光客も良心があるはず信用すべきです。キケンだとあれば安全の方策もあるはずです。何とか行政の知恵で市民や観光客が喜んで遊泳をし岩上でこうら干しをしながら健康づくりができる場となり留萌の名物に成るように、復活される事を願っております。

### 日刊留萌新聞

## 黄金岬で自然観察会

## カーナーの生態学ぶ

留萌市のふるさと館、留萌支庁主催の自然観察会が十四日、黄金岬で行われ、市民十数人が岩場にすむ生物の生態を学んだ。

自然観察を通して自然の大切さを知り、保護意識を高めようと、開かれていた。五月にスタートして今回で三回目。これまで二回は、るるもつべ岬の森で野山の植物や野鳥などを観察した。

参加者は、ふるさと館に集合したあと、行楽客でにぎわう黄金岬へ。靴を脱いで浅瀬へ入り、岩場にひそむ生き物を探取。イソガニ、ヤドカリ、ヒトデ、フナムシなどが次々と加えられ、バケツに入った。

ふるさと館の学芸員、市水産課の職員が指導に当たり、生き物の名称や生態な

どを説明。参加者は興味深そうに耳を傾けていた。

黄金岬の岩場で行われた自然観察会





やっぱり・・・人間は地球の“ガン”か?!

札幌市 田中利男

1992. 10. 28. 22時 NHKはある恐ろしい自然の「動き」を放映した。  
“プライム10《崩れゆく永久凍土シベリア森林開発の脅威》”の中で、世界の1/4を  
占めるシベリアの森「タイガ」が今、大量伐採されている。地下には永久凍土と呼ばれる  
巨大な氷の塊が在るが、伐採により広大な裸地が太陽光線を直接受けるため、地面の温度  
上昇によってその氷の塊が溶けて陥没し、沼になる。

「牛小屋が沼の中に沈んだ」と訴える婦人。火山の爆発とは違うが、口を開く地割れ、  
そして周囲の樹々は次々と沈んでいく沼に沈んでいく・・・ただボウゼンと画面を見る。

画面が変わる。氷の塊の中には大量のメタンガスが封じ込められていて、溶けると空中  
に放出され、地球温暖化を急速に進める、という。

やがて(2~3年後)沼が干上がると、その後は塩分のコビリついた乾地が広がるが、  
もちろん植物はない。沙漠化である。そして、画面は網の目のように広がる沙漠地を映す。

しかし、もっとショックだったのは、「太い良い伐採木は全部日本への輸出だ」「代金  
はブルドーザー・伐採用具との交換だ」というロシア人の話。

地球上の沙漠化は、毎年北海道の全森林の90%にも及ぶと言われるが、これを地球上  
の経過(遷移)とみるにはあまりにもインパクトが強い。

一般に、森林は1ha当り50人分の酸素をつくるそうだが、工業用・燃料・その他に  
消費され、人間様にはわずかしが残らない。文献によると、イギリス・ドイツ・中国は  
完全に酸素生産マイナス国、日本も近々仲間入りの様相で、大量の炭酸ガスや亜硫酸ガス  
の吸収を樹々をお願いしている。

会員の川端功治氏は、「一人当り26本の木がいるんだ。早く自分の樹をつくれ、  
そうでないと死ぬぞ!」というが(間違っていたら御免なさい)・・・

人間様よ、本当に今、考えてくれ。地球の“ガン”にだけはなりたくない。  
老婆心ながらの考えすぎ、ですかね。



初秋のシューパロ湖より  
3張紙と望む TAS.

## 社説

## トマムの自然は守られるのか

自然環境の監視役、道環境影響評価審議会が、アルファリゾート・トマムの拡張計画に見直しを迫ることになった。

「かつてない厳しさ」と、笹森秀雄会長(道東海大教授)が言っている。それだけ、業者の計画がずさんだった。そのままでは、自然破壊が進むのが目に見えていたのだ。

絶滅の恐れがあるイトウについて、業者の提出した「評価書」は全く触れていない。一帯には天然記念物のシマフクロウが生息している、と地元住民が言っているが、それへの言及、配慮もない。これらは、審議会指摘のごく一部にすぎない。

業者には「前科」がある。犯罪用語が悪ければ約束違反と言ってもよい。七年前の審議会に対し、排水施設をつくる計画を提出していた。それを条件の一つにして、審議会のOKが出たのだが、いまだに約束が守られていない。

それだけに、今回の審議会の指摘も「

ただ実行されるのか、いかにも心もとない。業者側が「計画審手が遅れているだけ」と強弁しているのを聞くと、危うい念が募る。

約束が守られないのなら、何のための環境影響評価なのか分からなくなる。その揚げ句、なし崩しに貴重な自然が破壊されては、たまったものではない。

「アセスメントの信頼性そのものを損なう。今後もうこうした事態が生じないよう、厳守を」と審議会もクギを刺している。さすがに言葉を選んではいるが、これはもう怒り、しかっているのだ。

業者は今度こそ、約束違反の前回分も含め、審議会の指摘を誠実に実行していかなければならぬ。

次に、一連の「トマム審査」で浮かび上がった審議会の問題点を考える。

第一は道のアセスメント条例の不備である。着工後の事後審査が制度化されていない。「トマム」の約束違反が分かったのも、拡張計画が出されて新たな審査

審議会の制度がある。審議結果にも、意見書を知事に提出できるが、業者側には質問「など」とさまざまな形で審議途中の論議が伝えられている。

業者側は計画の修正などを要する。それがまた、審議会の論議に反映される。このようなり方を否定するものではないが、住民側にはその間、全く情報が与えられない。公正な審議の上から、おかしなことがた。

いずれも最低の歯止めである。行政側にとってはわずらわしいことになる。過疎対策上から、何としてもリゾート開発を進めたいのかもしれない。

まして開発する側は、住民の反対意見などで計画の縮小や撤回に追い込まれるのが怖いだろう。

それでも、関係者みな汗をかき、知恵を絞って、合意を取り付ける必要がある。自然は一度損なわれると、復元が難しい。そして、そんな破壊された自然の中のリゾートなんて、何の魅力もないからである。

## “ 自然環境の大切さ ”

帯広市 池田啓介

野の草に関心を持ち始めてから、30有余年になります。北海道はまだ自然が豊かでしかも身近にある、という感覚のせいでしょうか。何気なしに見過ごしたり、いつの間にか別の用途に利用されていたりして、最近では、ずいぶんと自然が損なわれてきているように見受けられます。

道内の自然が、なぜ少なくなってきたかをちょっと考えてみますと、よく指摘されるものにリゾート開発やゴルフ場開発等がありますが、一様に地元・地域の活性化を図るというのがその理由になっています。

さて、この活性化が、地元の貴重な自然環境を破壊してまでも本当に必要か、ということを実際には考えるようになってまいりました。現に、最近、私共の管内で観光道路の建設が問題になっております。貴重な動植物に悪影響を及ぼしてまでも、観光道路の建設は必要なのでしょうか。どうも、人間は自然に対し、絶対に悪影響を与えることはない、という自負心があるようです。いろいろな計画を見ましても、自然環境が、現在住んでいる私共とどう関わりを持ってきたか、何か配慮が欠けているように思われます。

自然環境は、現在の技術力を持ってすれば、たやすく壊すことが可能ですが、復元となりますと、何十年、何百年かかるでしょうか。開発に要する以上の経費がかかるとも言われておりますから、現実には難しいでしょう。

そんなことを考えてみますと、一人でも多くの人たちに、北海道の自然の豊かさとそれを壊さない生活環境を守り続けることをアピールしたいと考えます。

特に、これからの時代を担う子供たちに、自然を残すことの意味や価値、森林を中心とした動植物の棲みかた等から理解し、学んでもらいたいことは、たくさんあります。

たくさんの生き物が生活できる環境が、人間にとっても良い環境なのであり、それが自然を大切にする心の基本にあることを是非、知ってもらいたい、という責任を感じて第11回めのボランティア・レンジャーの研修を受講しました。

経済の発展や活性化もそれなりの理由はあるでしょうが、私としては多くの人たちに、自然の大切さを理解してもらおうことのほうが、これからはより一層重要と考えますのでそれを伝えていくべく努めて参りたいと思います。

### 自然保護重視の時代

千歳川放水路計画や十観高原道の測量の問題は、北海道の自然を保護するにいうも一つの目的との間で、間違いない大きな際接を生んでいる。千歳川放水路は十年近く論議されておられ、十観高原道は二十一年間中断されていたものだ。こうした時間の経過のなかで、時代の価値観は次第に自然保護に向いてきていると私は判断してい

る。目的を達成するために他の手段としてどのようなものが考えられるのかを列記し、その相互比較を行う必要がある。

②コスト比較や、採用される手段にもなつて生ずる不都合についての評価資料の提供は、計画者側にまず責任があ

### 代替案と評価基準

る。

①目的間のバランスについての評価や、手段相互間の取舍については、裁判所への差し止め訴訟を通じて判定を待つても一つだが、自己統治にかかわるわれわれのワザを磨くという見地からは、議会や公聴会を通じての、最低限の合意形成が望ましい。

緊急性ない公共事業  
以上はこうした開発ともなう

# 田中直毅の 続ほかいどう新考から

る。

北海道開発局や北海道庁が計画を取り上げるとき、どのような考慮と手続きが必要だったのか。私は米田を中心とした判例の種々重々を参考にしながら、次のような考察が最低限必要だと思つてい



美々川

問題の処理にかかわる原則だが、北海道の具体的な事例を通じて思ふのは、開発による利益がそもそも

説得的ではないと思われることだ。わが国における公共事業が、かつてほど緊急性をもたなくなっていることを北海道において感ずることが多い。本来優先順位が高かつたものは、すでに相当程度実現しているのみならず、

これに対して北海道の自然は今後さらに価値を高めるであろう。千歳川放水路が予定されている美々川の源流部は既に値するものだと私は思った。また、十勝の士幌町と鹿追町天然湖を結ぶ全長約二十キロの十観高原道のうち、未開削区間は二・六キロすぎないそうだが、開通しても時間短縮は二十分程度だという。であれば大雪山系の自然保護の方に重配を上げた

### 公聴会で広い意見を

日高山系のアポイ岳にこの夏登山して、道有林に大盤の植樹が行われていることを知った。アポイ岳高山植物群落のすぐそばに、自生種以外のサクラなどの樹木と、整備された登山道を見たときには、正直目を疑った。

# 開発側に責任

この開発は、森林を市民の憩いの場に整備する「多目的保安林総合整備事業」のゆえたとあとで聞いたが、北海道庁はこうした開発を行うとき、公聴会を開き、地元の真の要望や、また専門家の意見を本当に聞く努力をしているのかどうか。

北海道は自然の厳しさと対抗しながら、多くの先人の汗によって開拓の成果を上げてきた。このこと自体はすばらしいことだが、逆にいえば自然尊重の気風は、日本のほかの地域に比べて、自然との闘争があった分だけ乏しいのかな、という気もする。

労働時間年間千八百時間という時代に入れば、北海道の自然の評価はさらに高まる、と思つて、そうしたソロバンもはじいてほしいのだ。

(経済評論家)

# ラベンダーについて

(Lavender)

富良野市西麓郷2

大宮正義

## はじめに

富良野に住んで、まず最初に思ったことは・・・前庭を紫色のラベンダーで飾って見たい・・・ということでした。

しかしながら、私には全くラベンダーについての知識は皆無でしたので、市内の本屋さんを探して見ましたが、なかなかラベンダーの育成に関する適当な文献は見当りません。そこで富良野市役所を訪れ市民課長さんに相談したところ、地元の花卉農家を紹介して戴きラベンダーに関する初歩的な知識を学んで参りました。

その後、5月上旬に30株のラベンダーの苗木を譲ってもらい、実践的に栽培してみましたので、その経過と栽培育成の方法、花後の処理等についてまとめて見ましたので、皆様の参考に供したいと思います。

いま、私の家の前庭には30株のラベンダーが紫色の花穂をつけ、芳しい香りを奏でています。来年はさらに「さし木」で増やし庭一面をラベンダーで飾って見たいと思っています。

自ら体験学習して見ることも、レンジャー技術の一助になるのではないかと考えます。

学名：Lavandula spp.

## ラベンダーの魅力

風が吹くたび、紫色の花穂から立ちのぼる芳しい香り。夏の訪れとともに、富良野地方にはラベンダーやポピーの花が咲き始め、車の窓を開けておくと車内まで芳香が流れてきます。

ラベンダーの魅力は、花や茎葉の香りのよさ、花の愛らしさ、銀緑色の葉の美しさにあります。また、観賞するだけでなく、さまざまに利用できる点もすばらしいチャーム・ポイントだと思います。耐寒性があり、容器栽培にも適していますので楽しんで見てはいかがでしょうか。



## ラベンダーについて

### 1. 性質と特徴

シソ科に属する常緑性の小低木（60センチ位）、原産地は地中海沿岸地方、全株に白毛が密生して灰白色に見え芳香がある。昔から薬用や香水の原料として栽培され、園芸用・観賞用としても人気があります。花卉は、いわゆるラベンダー色（紫）で、香料植物・油性があります、無色から帯黄ないし黄緑色で特有の芳香があり、主成分は酢酸リナロールといわれています。

有名な産地は、南ヨーロッパ・イギリス・オーストラリア。日本では北海道の富良野地方がよく知られています。最近各地にハーブ・ガーデンができ始め、ラベンダーの花だよりも意外な所から届くようになってきました。

ラベンダーは、花の香りといかにも西洋の野草といったロマンチックな風情が素敵ですが、こんもりと繁るシルバー・グリーンの葉も庭のアクセントになります。

### 2. ラベンダーの語源

ラテン語の「洗う」という意味に由来しているように、古くから香りのよい浴湯料に用いたり、洗濯物の香りづけに使われてきました。(注:1)

花や茎葉は、乾燥してもかなり長い間香り続けます。ヨーロッパでは、スティックのような小物を作って衣類やシーツ・タオルなどの引き出しに入れ、ほのかな芳香を移す家庭が多いようです。

この香りには、気持ちを落ち着かせる効果があると言われており、古くは貴婦人が失神したときの気付け薬に用いたり、またイギリスのエリザベス一世はラベンダーの花の砂糖菓子が大好物だったとも言われています。(注:2)

新鮮な花穂を白ワインや酢の香り付けにするほか、乾燥花をポプリやハーブ・ティー、香り風呂、リース、安眠枕、匂い袋、肩パット等に利用して見てはいかがでしょうか。なお、花の時期には、花束や生け花に加えてぜひ香りを楽しみたいものです。

(注:1) ラベンダーは、ラテン語のラヴァンドが起ころいで、これはラヴァレ（洗う）という動詞に由来している。ラベンダーの香りは古くから清潔、純粋さの象徴で、イタリア等ではラベンダーの茂みに洗濯物を広げ、乾いた時にその香りがしみこむようにしている、という。「あの家に行こう。そこはシーツが真っ白に洗われ、ラベンダーの香りがする」という表現には、清潔できちんと片付けられた家庭が表わされている。

(注：2) 今日では料理にはほとんど使われることはないが、17世紀の本によると、チャールズ1世の王妃が好んだ、ラベンダーの花の砂糖菓子の作り方が書かれている。これは、ラベンダーの紫色の花びらを刻んで、粉砂糖と混ぜ、ローズウォーターでペースト状にしたもので、プレーン・ケーキやビスケットにぬったものである。エリザベス1世もこの砂糖菓子が大好きで、テーブルの上には必ずいつもおいてあった、という。

### 3. ラベンダーの種類

#### イングリッシュ・ラベンダー

最も代表的なラベンダーで、細長い葉と薄紫色の輪散花序が特徴です。数多くの栽培品種があると言われていています。花色は淡い紅紫色から濃青紫色まで、白や桃色もあるようです。

#### スパイク・ラベンダー

野性的な香りの遅咲きラベンダーで、銀色の葉はへら形で大きめ、花茎は長く伸びて3本に枝分かれし、青紫色の小花がまばらに咲きます。耐寒・耐暑性に優れ、割りと丈夫な性質です。

#### フレンチ・ラベンダー

昔から薬用として用いられた品種で、花穂の先端につく紫紅色のほう葉が特徴で、開花が早く耐暑性もあります。学名はストエカスとも呼ばれています。

#### フリンジド・ラベンダー

フリンチ・ラベンダー系の品種で、茎が長めで花穂は薄紫色のほう葉が特徴、冬から春先迄咲き耐寒性がある。

以上が主なもので、近年それぞれに品種改良が行なわれているようです。

### 4. ラベンダー育成のポイント

イ. 土壌は日当たりと風通しのよい場所で、土質を調査し（ペーハー

6か6.5程度の）酸性土壌でない水捌けのよい土地が最適です。

ロ. 穴の深さは10センチ位、株間隔は50センチ位離して植えます。

ハ. 穴を掘ったら肥料としてコンポストが最適です。

ニ. 植えた後には水をたっぷりやりましょう。

ホ. 追肥としては、鶏糞がよく株元からすこし離して追肥をします。

ヘ. 水は一週間置き位にやるようにしましょう。

ト. 5、6年生の古い木を庭植えする場合は、葉と葉の間に水がたまらないように、葉が重なっている箇所は枝透かしをして風通しを良くしてやりましょう。また、地面からの雨水のはね返しも、下葉が腐ったり蒸れの原因になりますので、高うねに植えておくと水はけがよくて効果的です。

チ. 容器栽培の場合は、風通しのよい軒下等に取込み雨があがったらなるべく、日光に当てるようにしてください。

## 挿し木による増殖の方法

- イ. 挿し木の時期は 5月上旬、遅くとも5月10日頃までには終えましょう。
- ロ. 成木を頭から10センチ位の長さに切り、根元をしごいて小枝を払い5センチ位土壌にしっかりと差し込みます。
- ハ. 切り取った成木を、植える前に市販の発根剤に2時間位浸しておく  
と根つきが一層早まります。
- ニ. 挿し木後は、肥料は当分不要です。

## 5. 花後の処理

### 収穫の時期

- イ. 保存用として収穫する時は、ラベンダーの花穂が4〜5輪咲いた時点で、葉を4枚つけて切り取ります。こうすると来年は脇芽が伸びて2倍の花穂が収穫できます。またこの収穫は剪定も兼ねています。
- ロ. 収穫する日は、晴天の午前中がベストです。  
雨上がりや曇りの日は花が湿ってカビやすく、午後の強い太陽光線を受けるとせつかくの芳香精油分が揮発してしまうとされています。
- ハ. また、花が全開してしまうと芳香も薄くなり、乾燥の時に花が崩れてしまうので、タイミングをよく見て処理することが必要です。
- ニ. 収穫した花穂は、小さく分けて輪ゴムで束ね、できるだけ涼しくて風通しのよいところで、陰干しにします。
- ホ. 完全に乾いたら花をしごき落とし、乾燥剤を入れてガラス瓶か密閉した容器に保存します。
- ヘ. 生け花として楽しむ時は、水切りをした後容器に水を2〜3センチだけ入れて吸わせるようにし、決して 深水にしないこと。  
水揚げが良すぎると花が落ちてしまい、その上茎から溶けだす精油で水が濁ってしまいます。水はこまめに取り替えてやりましょう。
- ト. ラベンダー・スティックスなどの小物を作るときは、切り取ったら軽く新聞紙等に広げ、一日経ってから細工しましょう。
- リ. 花は7月下旬から遅くとも8月上旬迄には、切り取りましょう。  
6月中旬頃に花芽を切ると9月頃遅咲きとして開花します。遅咲きの場合でも、9月中旬ころには切り取りましょう。
- ヌ. 収穫後にはお礼肥をやりましょう。肥料は化成肥料一株小さじ一杯

## 6. ラベンダーの種々な利用法

### 新鮮な花の利用法

色や香りの素敵な切り花として楽しむことができますが、水揚げが良すぎると容器に水を入れると花がぼろぼろと落ちてしまいがちです。また、精油分が水に溶けだして水が濁ったり葉が黒くなるので、水は茎の切り口が浸る程度にします。

花穂を包むように茎を折り曲げてリボンを編み込んだラベンダー・スティックスは、乾いてからでは上手に出来ません。



花穂を数本白ワインに漬けて香りを移したラベンダー・ワインやグラニュー糖をまぶした花の砂糖菓子も、新鮮なうちにつくりましょう。押し花を作って置けばカードやハガキ等に使えます。

#### 乾燥させた花の利用法

乾燥の方法は、約20本位ずつ輪ゴムで束ね風通しの良い場所で陰干しにします。このままドライフラワーとして用いるほか、花束やリースなどにも最適です。

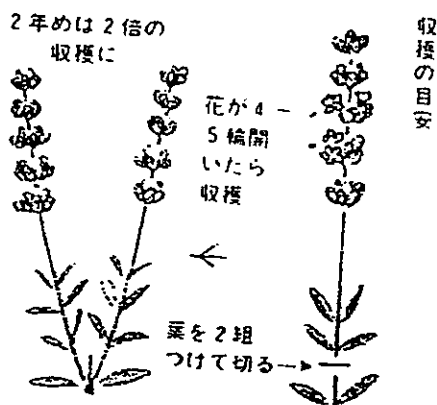
粒状の蕾をしごいて集め、乾燥剤を入れた密閉容器で保存し、ハーブティーを楽しんだりパウンドケーキに焼いてもおいしく戴けます。農薬を使わないで育てた自家製のラベンダーは、安心して口にすることが出来ます。なお、ラベンダーは神経を鎮めリラックスさせる効果があるとされており、昔からポプリの材料やさまざまな香りのクラフトにも利用されてきました。

例えば、布袋の中に綿で包んだラベンダーを詰めた安眠枕は、心地よい眠りを誘う香りの小道具として、またラベンダーを小さな人形に詰めてマスコットにしたり、可愛い模様の小袋に詰めた匂い袋などアイデア次第で香りの小物がたくさんできます。

ラベンダーの花穂と茎や葉をまぜて布袋に入れ、水を張る時から浴槽に入れて浸出させた「香り風呂」は、体を芯から温めぐっすり朝まで熟睡させてくれます。

その外にもいろいろと利用の方法があると思いますので、これから徐々に研究したいとおもいます。

皆さん ぜひ、紫のじゅうたんと鮮やかなポピーの花を見学にお越しください。



——ユキムシ (トドノネオオワタムシ) ——

冬の使者、雪虫 ——。ことしは冬の到来が早いのか、10月の初めにユキムシが見られました。小さなからだに綿のような白いフレアースカートををはき、風のない日に雪のように舞いながら飛んでいました。

ユキムシは、いったいどこから来てどこへ行くのでしょうか。ニオイヒバやシラカバの横を過ぎ、どうやらヤチダモの木に向かって飛んでいるようです。後を追って行き、ヤチダモの枝先を見上げると、たくさんのユキムシが群がっているのが見えました。お互いが到着の無事を喜び合っているのでしょうか。それとも新しい恋人をさがし求めているのでしょうか。

早速、書物をあさると、ユキムシの生活史について次のことが書いてありました。

春、ヤチダモの葉の裏でユキムシは卵からかえります。4回ほど孵化を行い、夏になりヤチダモの葉がかたくなる頃、はねのある虫が生まれます。その虫が、こんどはトドマツの根に移り、地下にもぐって夏を過ごします。ここでも孵化を行い、冬近くなると、またはねのはえた虫が生まれます。この虫が、また、もとのヤチダモの木へ移ります。このときの姿が、私たちが目にするユキムシということです。ヤチダモの枝先で卵を生みつけた親虫(ユキムシ)は、本格的に雪がふる頃になると、死んでしまい、木の芽の中で、卵だけがひっそりと春を待つのだそうです。

さて、夏の間、彼女たちの過ごしたトドマツの木はどこにあったのでしょうか。それは、ヤチダモの木から200 mほど離れた空き地にありました。そこで、帰宅途中(夕方)、そのトドマツを見にいきました。ユキムシは木のまわりを飛んでいましたが、根元の方から飛んでくる様子を見る事ができませんでした。こんど、じっくり観察したいと思います。どなたかユキムシに関する情報をお持ちでしたらお知らせください。

( 1992年10月18日に野幌森林公園で秋の森林観察会が催され、野幌森林公園事務所の春木課長がまとめられたテキストの中にユキムシについての説明がありましたので、ご覧ください。 )



## 「ゆきむし」について

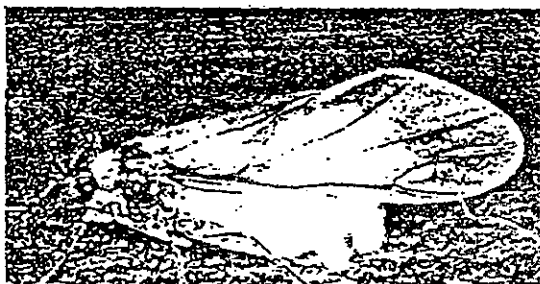
9月下旬頃から初冬にかけて、道路や町中の軒下などを「ふぁー」と静かに飛んでいる白い小虫たちは、俗称で「ゆきむし」と呼ばれています。

これは、ドロノネオオワタムシやリングワタムシなどアブラムシの仲間です。アブラムシ類の中でとくにワタアブラ科の仲間には白臘物質を分泌する腺が多数あり、この白臘物質が多く分泌されると体全体が白い綿で包まれたようになります。彼らは、晩秋、秋の寄生植物を離れて冬の寄生に移る移住飛行の途中なのです。

「ゆきむし」という名前は、白い綿状のロウ物質に覆われた虫体が、まるで雪のように見え、また、その出現が降雪期の近づいたことを告げるため付いたものでしょう。

この他に、日の当たる雪の上に現れて活動するカワゲラやカガンボ、ユスリカなどを「ゆきむし」と総称することもあります。

(トドノネオオワタムシ) (エノキワタアブラムシ)



## 秋の森林観察会

1992年10月12日 (日)

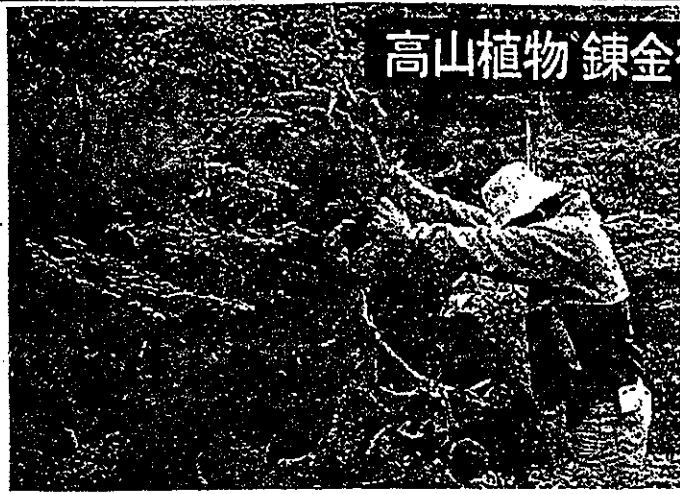
主催; 野幌森林公園事務所

協力; 北海道ボランティア・レンジャー協議会

高山植物 鍊金術 を追う

根回し周到 マツ盗掘

鹿 追



根回しを終え、盗掘される直前らしいアカエゾマツ。細い根を保護するため、テープでコケ類が巻き付けられている。鹿追町の大窟山国立公園内

幹太い上物を選び  
1、2年前から準備

【帯広】十勝管内鹿追町の大窟山国立公園内で貴重な高山植物のアカエゾマツ二十本が盗掘された事件で、その流通ルートを探っていくうちに、今回の盗掘は氷山の一角にすぎないことが分かった。業者は価格で一本二十一〜三十万円の値が付く、ある業者は「盗掘された物だと分かっていても取引している」と断言もなぐ語った。高山植物をわらった、鍊金術の実態を追った。

業者渡しし価格  
1本30万円も

盗掘現場はチキワサキの生荒地でも知られるヌヌフカワヌヌフ(一、二五二)の登山道をほすれ、約十分、登山道とは別の、盗掘道ができていた。盗掘後の根の本を枝か判断すると、盗掘ルートは密生しているアカエゾ

年前から少しずつ根を切つて平地に移植できるまでにしてから持ち去っている。現場には、いつまでも持ち出せる状態にした木も残されていた。

「山探り屋(盗掘者)は帯広にも五人いる」と、ある園芸関係者。盗掘ルートから一部の園芸業者、さらに愛好家と渡っていくが、グループは名前も電話番号も明かさないといい、盗掘を承知の上で売買することもある。アカエゾマツ五本で百万円払ったことがあつたと明かす業者もいた。いったん流通ルートに乗つてしまつと、盗掘木としての素性が問われることはない。

帯広市内の愛好家の庭を訪れるとアカエゾマツがあつた。「知人から譲り受けた。旭川のものらしい」と言葉多量した。別の愛好家は「山探りはないかも知っている。中には盗ルートを通り、山梨や長野へ送られる例もある」といふ。盗掘アカエゾマツが一般の店先に出るとはありえないといふ。心ある

'92. 11. 2.  
北海道新聞から

## ゴルフ場開発に思う

川 名 明

我が国は温暖多雨の島嶼で、森は小面積の起伏に富む急傾斜地であって、ここ3百年あまりの間、人工林や天然林が良好に維持されてきて、すでに述べたように、森林の面積率は高いが、人口当たりの面積は小さい。最近の人口増大と経済力の向上は、国民の生活条件を変えたが、スポーツには、新たにモトクロスやモトボールのような荒れ地を車で走りまわるゲームも入ってきて、その練習や真似ごとで、自然が所かまわず壊される迷惑もあるという。一方、ゴルフは紳士的スポーツとして、アメリカに次ぐ規模で普及され、1兆円産業、プレー人口1,500万の大台に乗ったという報道もある。バブル経済とその破綻のあとは、詐欺や会員券の値下がりなどの変わったニュースも飛びかった。

経済的・時間的條件から、私はゴルフの経験がないが、初めてゴルフ場を訪れたのは、中島道郎先生を中心とした科学研究費によるマツ林の利用の共同調査で、県庁林務課の方とともに訪れた千葉であった。1956年頃と思うが、主題を離れてクラブを握ってみたり、物珍しくいろいろ質問をした。ところが先方は私たちがゴルフ場の増加に批判的立場であると心配したようであった。日本経済も朝鮮戦争以降の発展が地につき、ゴルフ場の造成が目立ちはじめた頃で、反対意見もおこり、それを警戒する動きもあったのであろう。

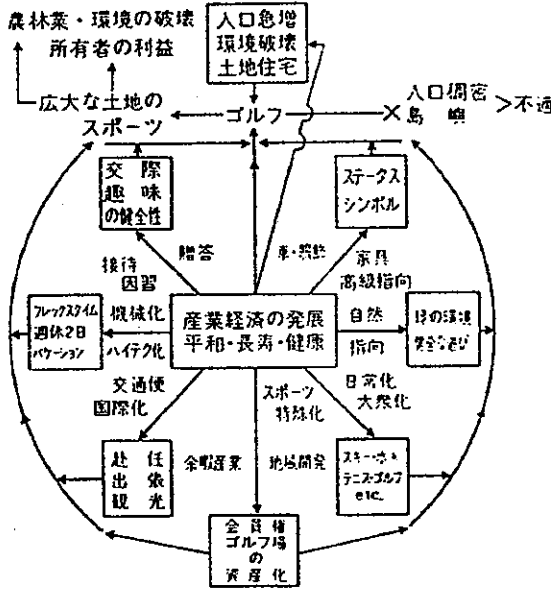
ゴルフ場に興味をもったのは、ずっと後で、1976年以降に森林レクリエーションの

特別研究費を受け、1979年に東京農工大学に森林風致の講座が認められた頃である。一連の研究のなかで、三鷹・調布・小金井の三市にまたがるゴルフ場跡にある都立野川公園で、人々の利用動態を調べた。同公園の最近の状況は知らないが、当時は芝生広場に人々が集まって有効に利用されていたことや、自由な行動が許されていた自転車や、残された樹列に誘導されてスムーズに走っていて、セントラルパークや、後にできた昭和公園のサイクリングコースとは異なり、ゴルフ場の歴史を感じさせた。ゴルフ場の数も増え、大面積の占拠に、環境その他の立場からの非難もあったなかで、その側面の一部に触れたと思った。

ゴルフ場問題を本当に考えたのは、1988年にマルセイユ大学で開かれた観光学会の日仏合同のセミナーのときであった。講演者は、北米と日本で世界のゴルフ人口の大半を占めると述べ、フランスではあまり盛んでないが、日本人を含めた滞在型のビジターを誘致するためにゴルフ場をつくることを提案した。いま120人を越すとも言われる人口千人当たりの日本のゴルファー数は、当時は103人で、北米81人、イギリス18人とされた。ゴルフ場面積の合計は小さな県よりも大きくなって久しい。その拡大は、いろいろ不都合を生じて反対も多い。一方で、プレーヤーにとってのゴルフ場は、緑の芝生が広がり、木々も添景を加えて美しい。しかし、刈り込まれた芝生の実体は緑の量に乏しく、これを赤外線写真で見ると裸地に近いという。スペースシャトルからの景色を報じた毛利さんも、千葉県の上空で「ゴルフ場と思うが、緑の剥げている所が点々と…」と報じた。

ゴルフはビジターが豊かな緑より、刈り

## ゴルフ場問題のダイアグラム



込まれた非日常的な美しさと、人の少ない空間の広さを享受して、ゆとりに満足を得るのであろう。また、日本のゴルフ場は、その緑に加え、豪華なクラブハウス、あるいはデラックスな食事や飲物を含め、外国と比べて高級イメージを指向しがちであるという。ゴルフ道具なども、アメリカは日本の半値であるとされ、また、不況で接待は自粛されているというが、アメリカではセルフプレーが多いのに対し、キャディーの存在を前提にする日本では倍以上の費用がかかるといわれる。

こういう話を聞くと、ゴルフを知らない私にとっても、ゴルフが自然に触れることに重点をおくスポーツとは考えにくい。その上、マツなどの立木や芝生の緑を美しく維持するために使われる農薬や肥料も問題視される。最近はいろいろの工夫もあるようであるが、水質汚染や有益な鳥や昆虫、野草の自然などの保護の問題には、環境庁、地方自治体、周辺の住民などの声が、いまも聞こえる。

しかしながら、若者・女性などの参加も増えて人気は底堅く、ゴルフを推進する立場からは、利用者数に対しゴルフ場不足の声もおおく、距離も遠いと聞く。最近のゴルファー数にみあう需要を満たすには、今の倍以上の4,000カ所のコースを要するとの考えもあって、一頃ほどのことはないにしても、造成への動きは現在も続くようである。若人の去った過疎の地域では、土地が売れば将来が明るいとの老人の待望も見られるという。これに対し、自然の中のスポーツのなかで、バブルが弾けたとされる日本経済のもと、公害問題を反省する人々のゴルフ場の造成規制などへの種々の思い、動きもおおきい。

ゴルフばかりでなく、ヨットもグライダーや小型飛行機など、種々のツーリングを試みるのもよい。社会秩序に支障の無いかぎり、時間と経費に余裕のある人が、明日の活動のためのレクリエーションを選ぶことに妨げはない。しかし、問題になるゴルフ場は、広い土地を要し、一人当たりの利用面積が大きすぎる。ゴルフの普及したイギリス系の国々でも、広大な面積をとれる北米やオーストラリアなどで多くの人に喜ばれるのに対し、発祥の地のイギリスの人口当たりのゴルファー数はすくない。日本も貴重な自然を残すべき所や、小さな島々は避けることが望ましい。特に海外で開発するには、当事国政府や経済界の賛成を得られても、市民が困る事態もあり得る。飢餓に悩む国々があり、21世紀の食糧と人口のバランスが憂えられる現在、自然と人の生活に大きく影響する広大なゴルフ場のありかたについて、諸条件が無視されるべきでないとする。(農大教授)

十勝支庁管内では、新春を期して 会員の初顔合せが予定されています。  
 十人前後の予定ですが、活動のいいきっかけになれば、と祈っています。  
 協議会の顔が見えない、具体的な将来への方向が見えない、という会員からの声  
 があります。道主催のボラ・レン実践セミナー開催時に、協議会のしかるべき方が  
 お見えになり、夜の自由時間を利用して説明会、意見交換会のような時間を持たれたら  
 いかがでしょうか。・・・



お知らせ

これから予定の野幌森林公園事務所の“森林観察会”

◎月例観察会（百年記念塔下売店横「森の自然教室」に集合し、開拓記念館周辺を散策）

1月の月例観察会 平成5年1月14日（木） 10時～12時

2月の月例観察会 平成5年2月12日（金） 10時～12時

◎四季の森林観察会（集合場所や観察コースなどは、1ヶ月前までに決定します。）

冬の森林観察会 平成5年3月7日（日） 9時30分～14時

お問い合わせ先

北海道野幌森林公園事務所（公園管理部公園利用課）  
 〒004 札幌市厚別区厚別野小野幌53-2 北海道開拓記念館内  
 電 話 011-893-0455（内線42番）

## 日本の原自然の破壊

日本の長い鎖国政策が解かれ、明治政府は積極的に諸外国の産物の導入をはかりました。それに伴い、いわゆる害虫も一緒にやってきたため、1914年に「輸出入植物取締法」が公布され、港や空港で輸出入植物の検査がおこなわれるようになりました。とすると、それ以前は様々な動植物が自由に、適応能力さえ備わっていたなら日本に入ってくるのが可能だったと考えられます。

北海道が誇る じゃがいも・かぼちゃ・米等の農産物もよく考えてみますと日本には本来なかったものです。であれば、案外と身近な所に外来種の生物がなにくわめ顔で、元からそこに居る風を装っているのではないかと考えられます。

生態学では、ある地域で植生が自然に移り変わっていく現象を「生態遷移」と呼んでおりますが、気候条件の違い（湿っているとか、乾いているといった）等でパイオニアとなる植物の種類は違いますが、いずれにせよ、植物群落は各々遷移の終着点、すなわち極相に到達しています。

日本の場合は森林が極相状態であります。森林に覆われているのが日本の原自然の最大の特徴といえるわけです。日本では、森は自然植生を成すばかりでなく、多少の破壊（山火事等）からの復活も非常に早いのが特徴です。（乾・寒地は困難ですが）

従って、いわゆる焼畑が行われても、森の復活は順調に行われたため、日本の大部分の景観は森林か、それに近い植物群落であったと考えられています。それを一変させたのが弥生時代に始まった水稲耕作であります。これは、日本の原自然であった森に後戻りさせることなく、人力によって維持される 新しい「自然」（里山）を出現させました。あくまでも整然と広がる稲田とそれを基盤とした農村の景観が、実は日本の原自然の破壊であり、自然の持つ生態遷移という力を、人間の力によってストップさせた状態であったのです。

人間が力づくで自然を押さえこんできた歴史を知ることが、日本の自然や日本の生物相の変化を考える上で大切なのは、日本の植物相に外来植物が加わるという歴史がここからスタートするからであります。稲田に群がるスズメたち、キャベツ畑の上を舞うモンシロチョウを何気なく見ておりますが、それらについて次回から一つずつ簡単ではありますが、とりあげてみたいと思います。 （文責 広報部 瀧谷）



(表紙のことば)

エゾマツは、その名のとおり北海道、千島、樺太等に自生しているマツ科トウヒ属の常緑針葉樹。古くから北海道を代表する樹として道木に指定されています。

かつては道内の各地で原生林が見られましたが、開発と乱伐のため、少なくなったようです。

エゾマツは、荒涼たる北方の原野で厳しい環境に耐え、力強く生き抜いてきた姿を彷彿とさせるため大正時代、主に国後島から名樹とされる原木が山採りされていました。

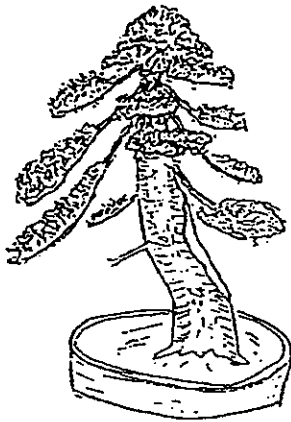
エゾマツには、エゾマツとアカエゾマツとがありますが、盆栽用とされたのはアカエゾマツで、エゾマツ(クロエゾマツ)は、大樹となる樹種のため主にバルブ材として利用されました。

エゾマツの枝をよく見ますと、厳寒の地で、雪の重みのため樹冠部を除いては枝が自然に下垂しています。そのため、老樹になるほどフトコロ枝は枯れ、周辺の枝と葉だけで樹勢を保っています。つまり、傘状の樹形が、自生状態での老樹の樹形ということです。

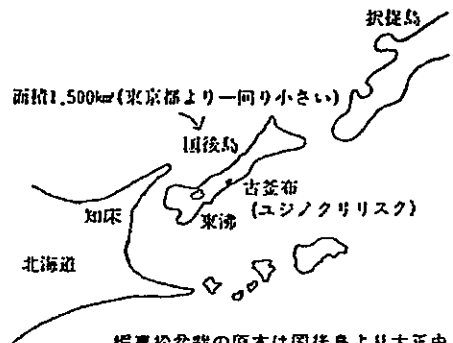
今では貴重となったアカエゾマツを盗掘し、売買する業者やマニアがいるようですが、それほどまでして手に入れたい、不屈の生命力とか風格といった、魅力が備わっているのでしょう。

現在では、挿し木繁殖もできますから、どうしても、という御仁はそういう入手方法をとられるのがよろしいでしょう。

貴重な自然を次世代へいかにして継続するか、が今真剣に考えられているのですから、目先の利益のさまざまな思惑とか政治絡みの駆け引きの材料に絶対にされないようにしたいものです。



蝦夷松盆栽は北方の原野で厳しい自然に耐えてきた力強い姿に魅力を感じる



蝦夷松盆栽の原木は国後島より大正中頃より昭和初期に導入された

編集後記 . . .

昨年は、年末にかけて、白いシジュウカラや白いカルガモが見つかったり、また大きな隕石が発見されたり、と興味深い出来事がいくつかありました。さて、会員の皆様のご協力により、無事に第24号を発行することができました。どうか、これからも皆様のご意見、感想等を含めまして、ご投稿方よろしくお願ひいたします。各地で、自然観察会等の催しが数多く行われるようになり、ごく自然な形で、一般の人々が環境問題について関心を持つようになりました。

少なくとも北海道ボランティア・レンジャー協議会員は、北海道の自然・環境を純粹に、私利私欲なくこれを愛し、大切にしたいと考えている人々から構成されていると信じておりますので、これからも高い識見を持てるよう努力しましょう。

一人一人の持てる力量や範囲は限られていますから、それらを集めることで、本協議会が成立している事実をどうか、心の隅に置いてください。協議会がどういう発展をするか、それは役員を含めた会員の皆様の知恵や行動にかかっていることをぜひ今一度、ご思量願ひます。

新春号ということではありますが、やはり北海道はこれからが冬本番という季節柄皆様、新年早々お風邪を召さぬよう、自重自愛ください。

本年も、野外での観察会等における、皆様のご活躍を期待いたしております。

( 広 報 部 )

北海道ボランティア・レンジャー協議会

会報「エゾマツ」第24号 1993. 1. 1.

発行責任者 大友 健

(表紙題字は 岡田 元北海道生活環境部長)